【再　生】

作・藤田ヒロシ

闇の中に響く声。

声　鏡よ、鏡、鏡さん　この世で一番美しいモノは？
鏡よ、鏡、鏡さん　この世で一番優しいモノは？
鏡よ、鏡、鏡さん　この世で一番愛しいモノは？
鏡よ、鏡、鏡さん
知っているのですか？知っているのでしょ？
鏡、鏡、鏡さん
鏡、鏡、鏡さん

○暗く狭い部屋（ナミの部屋）

ソファーに腰掛けたミナ。

ミナ　（強い口調で）ねぇ、どうして欲しい？何してほしい？さぁ、言ってみなさい。答えてみなさい。（ニヤリとして）あぁ、聞く事と聞き入れることとは違うからね。わかるでしょ？

胸の谷間を見せつけ様にして。

ミナ　（甘い声で）ねぇ、どうして欲しい？何してほしい？（ニヤリとして）あぁ、聞く事と聞き入れる事とは違うからね。わかるでしょ？

「ねぇ…さぁ…あぁ…」と、口を動かす。徐々にそれが声へとなっていく。

ミナ　ねぇ…さぁ…あぁ…。

と、囁くように声にする。

ミナ　ねぇ…さぁ…あぁ…。

と、喘き、身体をくねらせる。

ミナ　ねぇ…さぁ…あぁ…。

と、喘き、身体を激しくくねらせる。

ミナ　ねぇ…さぁ…。

絶頂を迎えるその手前、ナミの声がそれを遮る。

ナミ　鏡よ、鏡、鏡さん。

ナミ、ソファーに身体をうずめる。

姿を見せるナミ。

ナミ　鏡よ、鏡、鏡さん。

ナミ、ミナの周りをまわり、その隣に座る。

ナミ　ねぇ、どうして欲しい？さぁ、言ってみなさい。答えてみなさい。あぁ、聞く事と聞き入れる事とは違うからね。わかるでしょ？

と、冷たい目を一瞬見せ、去ってゆく。

ミナ　夢？いっぱい、いっぱいの人の望みを叶えてあげたい。癒してあげたい。だからもっといっぱい、いっぱい出逢って、いっぱい、いっぱい繋がりたい…いっぱい、いっぱい、いっぱい、いっぱい…ミナも癒されたい。

と、ソファーから滑り落ちる。

ミナ　所詮は『作り物』。この世の全てがどうかは知らない。だけれど少なくとも私のまわりはそうだ。高鳴る声も、罵声も、おねだりも、貼りつけただけのフェイク。それでも私は誰も騙してはないない。誰もが騙された振りをしているだけ。フェイクを破り、中身を覗いたところで癒されないことを、誰もが知っている。この世の全てがどうかは知らない。だけれど少なくとも私のまわりはそうだ。

～暗転～

ミナ　いっぱい、いっぱい……いっぱい、いっぱいのウソと私はいます。

闇の中に響く声。

声　呼吸をする度　瞬きをする度
肌にふれる度　歩みを進める度
一つの真実と三つのウソが生まれる
あの日から
涙を溢す度　爪を切る度
口紅を拭う度　笑顔を向ける度
一つのウソから三つのウソが生まれる
あの日から
壊れ続けているのです
あの日から
壊れ続けて来たのです

○暗く狭い部屋（サチの部屋）

ソファーに座っているサチ。テレビの明かりが馬鹿笑いの表情を

映し出す。
スパゲティーをむさぼり喰っている。やがてその手が止まる。一瞬その表情に影が落ちる。

サチ　ビール！（再び笑いだす）

マコトがビールを持ってくる。

マコト　サチ？
サチ　（笑っている）
マコト　サチ？
サチ　（笑っている）
マコト　サチ！

マコト、テレビを切りサチを睨むように見つめる。

マコト　時間だよ。
サチ　（スパゲティーをフォークに絡めながら）二次大戦当時、米軍ではトマトケチャップを絡めたパスタが一般的な兵隊の食事だったって知ってた？
マコト　行かなくていいの？
サチ　ＧＨＱが接収したホテルに大量のケチャップと乾麺を残して行ったって知ってた？
マコト　待っているよ。
サチ　その後始末の為に、ナポリタンスパゲティーが考案されたって知ってた？
マコト　（強い口調で）最後なんだよ！

サチ、チラリとマコトを見てから、スパゲティーを口にする。

マコト　サチ？
サチ　……。
マコト　サチ！

口の周りについたケチャップを舌で舐める。

マコト　時間だよ。
サチ　ナポリでトマトソースのパスタが人気だったからそう命名されたって知ってた？
マコト　サチが見送ってあげないと。

サチ　それはもちろんイタリア語でなく、英語だって……解るよね？

マコト　気持ちわかるけど、受け止めないと。

サチ　この国っていつもそう。世界は太平洋の向こうにしかないと思って、指くわえて水平線を眺めている。見てみろよ、窓の外。模倣の果ての壊れた景色。いっそのこと、あの日に５１番目の星になってしまえばよかったんだよ。そうなっていれば、狂った神話を引きずることもなかったのにな。

マコト　サチ？

サチ　自由と権利、そして平和を勘違いすることはなかったのにな。

マコト　サチ！

サチ　俺もお前も、もっと生きることを愛せたのにな！

サチ、テレビをつける。『馬鹿笑い』が聞こえてくる。

マコト　この世のどこにいても変わらないよ。わかってるでしょ？

サチ　（かすかな声で）行かない。

マコト　えっ？

サチ　私、行かないから。マコト、行っていいよ。

マコト　ダメ。

サチ　どうして？

マコト　最後のお別れなんだよ。アイツのこと愛していた人たちがお別れをするのよ。サチ、行かないといけないよ。サチが一番…。

サチ　違うよ。おとといの夜、アイツの死んだ日、死んだ時。私はテレビを見てた。アイツの嫌いな歌番組を、シーツにくるまって、名字を知らない男と、ね。

マコト　ウソ。

サチ、マコトに何かを投げつける。マコト、それを拾う。それはラブホテルのライターだ。

サチ　マコト。彼と上手くいってないんでしょ？今度それをさりげなく使ってみたら？男の嫉妬って、可愛いよ。

マコト　…。

サチ　真面目で、従順。賢い犬コロみたいなマコトのそのイメージ悪くないけど、飽きられちゃうよ。

マコト　刺激？そのためにホテルに行ってコレ持ってきたの？

サチ　恋愛なんて、始まりのその瞬間がピークで後は下がるだけ。私とアイツは…自分で言うのも笑えるけど…激しかったじゃない？だから、下る勢いもあって、惰性の転がりも長くてね。ここまでコロコロ、コロコロ…って。

マコト　でも、最後なんだよ。

サチ　いいじゃない。私が行かないと始まらないわけじゃないし。死んだらそれで終わり。別れも何も…もう終わってるじゃない。

マコト、サチの手を掴み立ち上がらせる。

サチ　ウザイな。説明的に飛び出す字幕。ウザイ。『はい、ここ笑うとこ』って、ＡＤの合図みたいでさ。俺たちサクラなのかよ。ウザイよ。そう思いながらも、気がつけば字幕追ってる俺、ウザイよ。笑ってる俺、ウザイよ。一緒に笑っているお前、ウザイよ。

サチ、マコトの手を振り洗う。

サチ　ウザイよね。勝手に死んだアンタも、ウザイんだよ。

ソファーに倒れ込むサチ。

その肩あたりにそっと手を伸ばそうとするマコト。しかし、その手を止める。そして、毛布をかける。

マコト　行ってくるね。

出て行くマコト。

○いつかのホテル

テレビからはラブソングが流れて、シャワーの音がかすかに聞こえる。

ソファーにはサチ。毛布にくるまってリズムを刻みながら、スパゲッティーを食べている。

サチ　外れ。腰が弱い、ヘロヘロ。お手軽、便利、早いだけが取り柄です、みたいな…最悪。最近はやたらと細いし、食べ応えがない。外見だけは決め込んでうまいぜって…最低。満たしてはくれない。空っぽ。

ラブソングが流れる。

サチ　空っぽな歌。空っぽな愛。

と、リモコンを手にしてテレビを消そうとするが、

サチ　それでいいのかも。

と、リモコンを手放す。

サチ　それがいいのかも。

サチ　**と、スパゲッティーを食べる。**

当たり。まるで生、シコシコ。お手軽、便利、早い、だけど本物みたいな…悪くない。最近はやたらと低カロリー、あっさりしている。それでもそれなりにうまいぜって……悪くない。後に引かない軽い感じ。空っぽ。

サチ　**ラブソングが終わる。**

空っぽな歌。それでも終われば『消えた』って感じがする。そう、消えて初めて存在を実感する。それなら、空っぽな愛も消えたら感じる？この夜も、この相手の存在……感じる？

サチ　**突然、笑いだす。そして、ピタリと止まる。**

（シャワールームに向かって）ねぇ、アンタはどうなの？朝日が昇れば感じる？カレンダーを一枚廻れば感じる？新しい手帳を買ったら感じる？ねぇ、感じるの？

サチ　**ただ、シャワーの音が響く。**

また別のラブソングが流れだす。

空っぽな歌。空っぽな愛。

サチ　**と、リモコンを手にしてテレビを消そうとするが、**

愛は地球を救う。ならこの空っぽな愛で救えるの？ダメ？ダメだよね。空っぽなんだもの。ダメよね。

サチ　**と、リモコンを手放す。**

でもさっ、一体どんな愛なら救えるの？ずっとずっと壊れ続けているよ。救われないよ。救えないよ。どんな愛なら救えるの？まさか、その愛も空っぽなの？まさかね。違うよね。私のとは違うものね。デコボコしている？トゲトゲしてる？ツルツルしてる？違うよね。人それぞれ違うよね。みんなみんな違うのに、それで一体何を救うと言うの？キラキラしてる？テカテカしている？ピカピカしている？それとも、深い……深い……漆黒の……。

サチ　**と、その身を縮める。**

それでもやっぱり言い続けるの。愛は地球を救う。愛が何か、救いが何か、そんなことを知ることなしに、言い続けるの。愛は地球を救う。愛は地球を救う。愛は地球を救う。愛は地球を救う。愛は！……私を救う。

サチ　**携帯が鳴る。しかし、出ようとはしない。**

ただ今、空っぽで電話に出ることは出来ません。御用の方もピーっと鳴ったら私を忘れてください。

～暗転～

サチ　ピー。

○暗く狭い部屋（サチの部屋）

ソファーに寝ているサチ。

マコトが現れる。

マコト　サチ。行ってきたよ。

眠りについているサチ。

マコト　サチ？

サチの顔を覗き見る。

その肩に触れようとするが、手を止めて背を向ける。

マコト　『アイツは生きました。アイツは縛られ続ける何十年より、自由な二十九年を生きたんです』

小さく鼻で笑う。

マコト　自由に生きた……ね。勝手な言葉。何も知らないくせに、知ろうとしなかった癖に。自由に生きた……どこに自由があったのよ。それを求め続けては来たけどね。

しばしの静寂。

サチが体を起こすことなく、放つ。

サチ　違う。

マコト　えっ？

サチ　逃げ続けてきた。

マコト　『逃げ続けて』？

サチ　生きることから。

マコト　……。

サチ　だから……。

言葉を飲み込む。

マコト　『だから』？

体を起こすサチ。

サチ　終わった話。

マコトが何かを言おうとするが、携帯がなる。

マコト、慌てて携帯をとり、部屋の隅へ。小声で何やら話している。

サチ　『ずっと私の中に生きている』…よく聞く言葉だけど、私の中にアイツは生き続けないな。一瞬……ほんの一瞬のキラメキの為に二人は肌を合わせた。今さらもうアイツの欠片には用はない。

サチ、壁に貼られた写真を次々と剥がしてゆく。

電話を終えたマコトがその姿を眺めている。

サチは次第に荒々しく剥がし始める。そして、最後の一枚になった時、その手を止める。

サチ　彼…でしょ？

マコト　え？

サチ　電話。

マコト　うん。

サチ　『逢いたい』って？

マコト　別に…。

サチ　行きなよ。

マコト　そうじゃないから。それに、気分でもないし。

サチ　でも、行きなよ。逢いたくなくても行きなよ。向こうがそう思っているなら、行きなよ。

サチ、手に持った写真をゴミ箱にためらいなく捨てる。

サチ　行きなさいよ！

マコト　サチ？

サチ　『また今度』…嫌な言葉。嫌いな言葉。何気なく口にしているんだろうけど、それが余計に寂しい思いにさせている。『また今度』『また今度』…大切なのはその瞬間。今なのに、なぜ？今この瞬間だから意味があるのに『また今度』。三日月が青く光る夜なのに『また今度』。風がべっとりまとわりつく海なのに『また今度』。私がまた一つ壊れたのに『また今度』。アイツがまた一つ壊したのに『また今度』二人が破滅へと転がり続けているのに『また今度』『また今度』『また今度』…。口にする度、扉は閉じられ、そして開けられる。次を……明日を……未来を……不確実なものを信じようとしたから、幾つもの嘘が残された。幾つもの『また今度』それは……。

サチ、最後の一枚を外す。

サチ　行きなよ。待っているんでしょ？！

マコト　…。

サチ　喧嘩でもした？いいじゃないそんなこと。昨日のことなんて、そんな昔、忘れなよ。

マコト　いいの、ホントに。

サチ　行きなよ。明日なんて、未来なんて待っていてもやってこないんだよ。行きなさいよ！

サチ、鋭い視線でマコトを見る。

マコト　いいの、ホントに。

見つめ合う二人。

しばらくして、にっこり微笑むサチ。

サチ　知らなかった。ずっとつながっていれたかわかった。

マコト　何が？

サチ　わかった。ずっと友達やってこられたかわかった。

マコト　何よ。

サチ、勢いよくマコトの寸前に立つ。

サチ　私は今、私を見ている。マコトは今、マコトを見ている。お互いの瞳に映り込んだ……一番近くて、一番遠い存在を見つめている。そうなんだよね。

と、にっこり微笑む。

マコト　……。

サチ　あの日からそうなんだよね。

マコト　……。

サチ　今の私は、哀しい顔している？

マコト　哀しいの？

サチ　わからない。すっきりもしてる。

マコト　突然降り出す雨には、ただただ、ジタバタするだけ。

サチ　天気予報は当てにはならない。明日はどうかな？

マコト　誰にも本当はわからない。当たっても、外れても明日は、明日。

サチ　でも、知りたがる？

マコト　何もすがるものがないのは不安だから。

サチ　スリル、あるのに。
マコト　同じ事よ。
サチ　同じじゃない。
マコト　同じ何だって。
サチ　不安なの？
マコト　不安でしょ？
サチ　明日の天気は？
マコト　晴れ。
サチ　本当に？
マコト　今は真実なんて意味がない。
サチ　だね。
マコト　今は嘘でもいい。
サチ　だね。
マコト　本当は嘘は嫌？
サチ　…。
マコト　本当は嘘は嫌。
サチ　無理だよ。そんなこと望んだら、生きられないよ。
マコト　そうね、生きられないね。
サチ　全部ぶちまけて、滅ぶのもいいかもしれない。きっと、楽になる。
マコト　そうね、楽しいかも知れない。
サチ　楽だよ、きっと。信じ合えない苦しみも、解り合えない苛立ちも、分け合えない哀しみもない。
マコト　でも、曝け出せない。
サチ　だから、生きられない。
マコト　……。

サチ、にっこり微笑んでゴミ箱から袋を出す。それを持って出てゆこうとするが出口で止まり、

サチ　朝、起きれそうにないから。

サチ、ゴミを捨てに行く。

サチが消えると、マコトは携帯を手にして電話をかけようとするが、その手を止める。

マコト　そうね、生きられない。

～暗転～

○暗く狭い部屋（ミナの部屋）

ミナ、ソファーに座って、手鏡を見つめている。

ミナ　鏡よ、鏡、鏡さん　この世で一番醜いモノは？
鏡よ、鏡、鏡さん　この世で一番残酷モノは？
鏡よ、鏡、鏡さん　この世で一番汚れたモノは？
鏡よ、鏡、鏡さん
知っているのですか？知っているのでしょ？
鏡よ、鏡

ミナ、声を止めて鏡を外す。

テーブルに置かれたヨーグルトを手にする。それを食べながら、

ミナ　多分死んじゃったな。吹っ飛んだからね。派手に。でも何で、あそこを切ろうとしたの？すぐ近くに横断歩道あるのに。

スプーンを口に入れたまま、考え込む。

ミナ　そっか、死にたかったのか。

再びヨーグルトを食べる。

ミナ　目があったね。笑っていたでしょ？猛スピードの車に跳ねられ、宙を舞いながら……笑っていた。ちゃんと見ていたんだから。痛くなかったの？時間がゆっくり流れるって言うけど、痛みもゆっくり伝わるの？

スプーンを口に入れたまま、考え込む。

ミナ　それにしても、昨日の仕事は最低だったな。

ヨーグルトを食べ終える。

ミナ　あのタクシーの運転手。気付いていた。ルームミラー越しに、なめ回すように見ていたよね。間違いない。確信を持って聞いてきたよね。『お客さん、お仕事帰りですか？夜遅くまで大変ですね』口元がニヤリと歪んでいたよね。ちゃんと見ていたんだから。『運転手さんだってお仕事でしょ？』『確かにそうですね、お互い大変ですな』お互いかぁ……？アンタも嫌々やっているんだね。仕方なく、流れ着いたところにいるんだね。ひと仕事終える度、自分が削られてゆくんだね。それなら、癒し

てあげようか？『いっぱい、いっぱい、癒してあげる』

スプーンを口に入れたまま、考え込む。

ミナ　それにしても、昨日の仕事は最低だったな。

ヨーグルトを食べ終える。

ミナ　『いけるか、いけないか』ただそれだけ。テクニックは必要。でも、理論はいらない。三十分。カメラを止めて説教して、アンタは満足。ある意味『いった』。それがどうした？思い描いた夢にはじかれて流れてきたんだろ？同じ穴のムジナ。それなのにプライド？（声色を変えて）なぁに、プライド？（地声に戻り）疲れるだけだよ、そんなの。

ヨーグルトを食べきる。

ミナ　もういんだって。黙れよ。うるさいよ。わかってるんだって、そんなの全部全部わかってここにいるんだよ！

言い放ち、立ちつくす。

声（ナミ）　ねぇ、どうして欲しい？何してほしい？さぁ、言ってみなさい。答えてみなさい？

ナミが現れ、ソファーに座る。

ナミ　ねぇ、さぁ、あぁ。

ミナ　……。

ナミ　ねぇ、さぁ、あぁ。

ミナ　……。

ナミ　ねぇ、さぁ、あぁ。

ミナ　……。

ナミ　ねぇ、さぁ…。

ミナ　あぁ！（と、奇声を上げる）

静寂。

ナミ　疲れた。これ以上は無理よ。

ミナ　予期はしていた。でも、覚悟は出来ていなかった。

ナミ　君は誰も愛せない。

ミナ　それは、私が愛された思い出がないからだと彼は言った。

ナミ　受け入れられない。わかることは出来ても、愛せない。ごめん。

ミナ　それは、彼が自分自身を守るためだと、私は感じた。

ナミ　きっと、これから出会う。お互いに、いい出会いが待っているはず。

ミナ　それは、彼の不安への裏返しだと、私は感じた。

ナミ　ね、だから……これ以上、傷つけ合うのは……その傷を舐め合うのはやめよう。

ミナ　何でそんなにも必死に言葉を選んで話すの！私のこと『愛している』って言ったじゃない？！私があなたを愛していない？私はあなたを愛している！私は愛が何を知っているの。だから、私は全てをあなたに求めなかった。全てを曝け出しはしなかった。私は愛が何を知っているの。だから、肌には触れても、心には触れなかった。私は知っているの。私はあなたを愛しているんだから。

ナミ　さよなら。

静寂。

ミナ　あの日から私はずっとずっと考えているよ。そばにいた時よりもずっとずっとあなたを考えている。とても、苦しい。とても痛い。だから、私は……。

間

ミナ　ねぇ、どうして欲しい？何してほしい？さぁ、言ってみなさい。答えてみなさい。あぁ、聞く事と聞き入れることとは違うからね。わかるでしょ？やがて痛みは快楽に変わってゆく、その一瞬でごまかして、私はここにいる。あなたの言うとおり、誰も愛せない。（ナミに向かって）ねぇ、どうして欲しい？何してほしい？

ナミ　……愛して。

ミナ　（固まる）

ナミ　愛して。

ミナ　嘘よ。さぁ、言ってみなさい。答えてみなさい。

ナミ　愛してほしい。

ミナ　知っているわけないんだ。誰だって。そうだろ？愛なんて知らないだろ？形も色も味もない。何も救えない。

ナミ　それでも、愛してほしい。

ミナ　……それなのに、あの頃の私は『愛している』って言葉を求めていた。

ナミ　いっぱい、いっぱい、いっぱい、いっぱい……愛して欲しい。

ミナ　（絞り出すように）あぁ、聞く事と聞き入れることとは違うからね。わかるでしょ？

と、ソファーを抱きしめる。

ミナ　これしか残されていなかった。それも嘘。全てを隠して、それでいて存在を許される。欲望のままに求められる。その限られた時間の中で、世界は私を中心に回る。全ての音、全ての涙、全ての記憶が消える。

と、強くソファーを抱きしめる。

ミナ　自慢できる場所じゃないけれど、私は選んできた。……そう思っていないと、私が可哀そうだ。

と、ソファーに身を預け目を閉じる。

ナミ　鏡よ、鏡、鏡さん。鏡よ、鏡、鏡さん。

ミナ、ナミの膝に頭を預け横になる。

ナミ、そっとミナの頭を撫で始める。

ミナ　ねぇ、私のこと愛している？

ナミ　もちろん。

ミナ　本当に？

ナミ　もちろん。

ミナ　私が『殺して』ってお願いしたら、そうしてくれる？

ナミ　もちろん。

ミナ　綺麗に殺してね。目が飛び出たり、失禁したり、内臓が飛び出したり、顔が歪んだり、歯茎がむき出したり……嫌だかね。

ナミ　もちろん。

ミナ　あっ、全身の皮を剥ぐっていうのはありかもね。綺麗になれる。

ナミ　そのままが一番綺麗。

ミナ　汚れちゃったよ。

ナミ　そんな事ないよ。

ミナ　……なら、どうやって殺してくれるの？

ナミ　睡眠薬と一酸化炭素が一番綺麗。

ミナ　それなら一人でも出来るね。

ナミ　でも、一人では逝かせないよ。

ミナ　ありがと。

しばしの静寂。

ナミ　こうしていると、生きているという感覚がよくわかる。
ミナ　そうだね。
ナミ　少しずつ壊れてゆくのを感じる。
ミナ　怖い？
ナミ　（首を振る）ただ感じるの。生きているって。壊れてゆくって。
ミナ　そうだね。
ナミ　ねぇ、私のこと愛している？
ミナ　もちろん。
ミナ　本当に？
ナミ　もちろん。
ミナ　私が『殺して』ってお願いしたら、肉体以外も殺してくれる？
ナミ　もちろん。
ミナ　ありがと。

と、静かに震えだす。

ナミ　大丈夫？
ミナ　大丈夫。

しかし、更に震える。

ナミ　怖がることはないよ。もう、私たち―。
ミナ　戻れないんだよね？
ナミ　戻りたい？
ミナ　戻れるの？

と、勢いよく身体を起こす。

ナミ　作りモノなら壊せばいい。
ミナ　壊せば、戻れる？
ナミ　壊せば……。
ミナ　『壊せば』？

と、ゆっくりゆっくりとナミの首に手を掛ける。

ミナ　教えて。壊れたその先。そこは「やり直したい過去」それとも「逃げて行きたい未来」

～暗転～

○暗く狭い部屋（サチの部屋）

サチがソファーに座っている。

マコト、食事を運びカーテンを開けようとする。それをサチが制す。

サチ　止めて！

マコト　でも体によくない。

サチ　疲れてる。そのままにしておいて。

マコト　でもね…。

サチ　よほどそこから見える景色の方が体に悪い。偽善で塗り固めた高層ビル。アイツが嫌った世界。私が憎んだ世界。

マコト　……。

サチ　私はどこに帰ればいいの？

マコト、そっとサチに近づき肩を抱く。

マコト　疲れているのでしょ？

サチ、マコトを睨みつける。マコト、視線を外し、離れる。

サチ　あなたは自分が正気であると、言い切れる？あなたには私はどう映っているの？

マコト　疲れているのでしょ？

サチ　どうなんだろう？

マコト　急ぐことはないよ。ゆっくりでいい。

マコト、再びカーテンを開けようとする。しかし、サチの声が止める

サチ　子供の頃、作った覚えがあるの。思い出したのよ。どうしてかしら、突然思い出したの。大したことでもないに…でも、覚えていた。不思議よね。とっくに捨てた記憶なのに。

マコト　……。

サチ　段ボールと色画用紙で四角い乗り物を作ったの。あれは車じゃなかったの。本当はタイムマシーン。

マコト　『タイムマシーン』

サチ　そう、タイムマシーン。だけどね、誰にもそれとは言えなかったの。だって、やり直したい過去も、逃げて行きたい未来もなかったから。

マコト　本当にタイムマシーンだったの？

サチ　本当にタイムマシーンだった。

マコト　やり直したい過去も、逃げて行きたい未来もなかったのに？

サチ　……。

マコト　誰にも言えなかったのに？

サチ　……。

マコト　本当に？

サチ　……。

マコト　本当に、やり直したい過去も、逃げて行きたい未来もなかったの？

サチ　！

マコト　やり直したい過去も、逃げて生きたい未来も持っている。そう、今は持ってる。

マコト、カーテンを開ける。

明かりが不規則に揺れ、ノイズが響く。

その中に響く声。

声　呼吸をする度　瞬きをする度

肌にふれる度　歩みを進める度

一つの真実と三つのウソが生まれる

あの日から

涙を溢す度　爪を切る度

口紅を拭う度　笑顔を向ける度

一つのウソから三つのウソが生まれる

あの日から

壊れ続けているのです

あの日から

壊れ続けて来たのです

それらが止むと、サチがソファーに座って、マコトがその奥、壁の前に立ってサチを見つめている。

サチ　ビール！

と、ビールを受け取るようなしぐさ。

マコト　サチ？

サチ　……。

マコト　サチ？

サチ　……。

マコト　サチ！

間

マコト　時間だよ。

サチ　（スパゲティーをフォークに絡めるような動き）二次大戦当時、米軍ではトマトケチャップを絡めたパスタが一般的な兵隊の食事だったって知ってた？

マコト　行かなくていいの？

サチ　ＧＨＱが接収したホテルに大量のケチャップと乾麺を残して行ったって知ってた？

マコト　待っているよ。

サチ　その後始末の為に、ナポリタンスパゲティーが考案されたって知ってた？

マコト　（強い口調で）最後なんだよ！

サチ、顔を上げるがすぐに、スパゲティーを口にするような動き。

マコト　サチ？

サチ　……。

マコト　サチ！

口の周りについたケチャップを舌で舐めるような動き。

マコト　時間だよ。

サチ　ナポリでトマトソースのパスタが人気だったからそう命名されたって知ってた？

マコト　サチが見送ってあげないと。

サチ　それはもちろんイタリア語でなく、英語だって……解るよね？

マコト　気持ちわかるけど、受け止めないと。

サチ　この国っていつもそう。世界は太平洋の向こうにしかないと思って、指くわえて水平線を眺めている。見てみろよ、窓の外。模倣の果ての壊れた景色。いっそのこと、あの日に５１番目の星になってしまえばよかったんだよ。そうなっていれば、狂った神話を引きずることもなかったのにな。

マコト　サチ？

サチ　自由と権利、そして平和を勘違いすることはなかったのにな。

マコト　サチ！

サチ　もっと生きることを愛せたのにな！

マコト　この世のどこにいても変わらないよ。わかってるでしょ？

サチ　（かすかな声で）行かない。

マコト　えっ？

サチ　私、行かないから。マコト、行っていいよ。

マコト　ダメ。

サチ　どうして？

マコト　最後のお別れなんだよ。アイツのこと愛していた人たちがお別れをするのよ。サチ、行かないといけないよ。サチが一番…。

サチ　違うよ。おとといの夜、アイツの死んだ日、死んだ時。私はテレビを見てた。アイツの嫌いな歌番組を、シーツにくるまって、名字を知らない男と、ね。

マコト　ウソ。

サチ、マコトに何かを投げつけるような動き。マコト、ポケットから何かを取り出す。それはラブホテルのライターだ。

サチ　マコト。彼と上手くいってないんでしょ？今度それをさりげなく使ってみたら？男の嫉妬って、可愛いよ。

マコト　…。

サチ　真面目で、従順。賢い犬コロみたいなマコトのそのイメージ悪くないけど、飽きられちゃうよ。

マコト　刺激？そのためにホテルに行ってコレ持ってきたの？

サチ　恋愛なんて、始まりのその瞬間がピークで後は下がるだけ。私とアイツ

は…自分で言うのも笑えるけど…激しかったじゃない？だから、下る勢いもあって、惰性の転がりも長くてね。ここまでコロコロ、コロコロ…って。

マコト、ライターをつけようとするが、何度やっても付かない。

マコト　でも、最後なんだよ。

サチ　いいじゃない。私が行かないと始まらないわけじゃないし。死んだらそれで終わり。別れも何も…もう終わってるじゃない。

と、手をひっぱられた様に立ち上げる。

サチ　ウザイな。説明的に飛び出す字幕。ウザイ。『はい、ここ笑うとこ』って、ＡＤの合図みたいでさ。俺たちサクラなのかよ。ウザイよ。そう思いながらも、気がつけば字幕追ってる俺、ウザイよ。笑ってる俺、ウザイよ。一緒に笑っているお前、ウザイよ。

と、ソファーに倒れこむサチ。

マコト、サチの肩あたりにそっと手を触れる。そのまましばらく時が止まったように固まる。

そして、頭も隠れる様にサチに毛布をかけ、

マコト　ウザイよね。勝手に死んだアンタも、ウザイんだよ。

サチを見降ろす。

やがて、絞り出すように話し始める。

マコト　美しいものしか信じず真実を見ない奴。正論だけ吐いて正義を知らない奴。悪意を抱かないことが優しさと勘違いしている奴。怒りに震えた拳の振り上げ方を知らない奴。涙の流し方を知らず笑顔を貼りつけている奴。ウザいんだよ。

強く揺るぎない目を見せる。

マコト　まっすぐに純粋に生き続けたアンタ。ウザイんだよ！

携帯がなる。

マコト　ただ今、壊れました。御用の方もピーっと鳴ったら私たちを忘れてください。

～暗転～

全てが闇に包まれ、発信音が響く。

ＦＩＮ

上演記録

ふじのくに芸術祭 2013 演劇コンクール参加作品

迷子の遊園地 SpecialAct 「再生」

作・演出：藤田ヒロシ

2013 年 11 月 10 日(SUN)15:00～/18:00～

会場：ライブハウス G-side

出演：北澤さおり、辻優子、白柳友紀、喜友名加奈

スタッフ：土谷侑子、れいこ、朝田真由美、北澤智仁

無断使用・転用禁止